

# idea

ニュースレター「アイデア」

2024.7

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

- 1 | 二言三言 | 一関市 市長公室 政策企画課 DX推進係 (後編)
- 3 | 団体紹介 | 東山郷福餅つき隊
- 5 | 地域紹介 | 深萱自治会 (藤沢)
- 7 | 企業紹介 | ふるさとらいふ千厩店 (千厩)
- 8 | 博識社のフクロウ博士 | 地域運営の落とし穴®️ 子どもの仕事
- 9 | センターの自由研究 | 仕事の流儀ファイルNo.5 「茅葺屋根の葺き替え①」



### 今月の表紙

市内のとある民家。周囲の風景とマッチした茅葺屋根に興味を感じます。住居空間はリフォームしており、茅葺屋根を維持するために必要な「煙」を屋根裏に浸透させられない(燻蒸できない)ため、「茅の痛みは早い」と家主さん。「暮らしとのミスマッチ」が生じている茅葺屋根ですが、その葺き替え現場(別のお宅)に密着しました。(自由研究)

idea

発行 いちのせき市民活動センター  
せんまやサテライト

〒021-0881 一関市大町4-29 なのはなプラザ4F Tel 0191-26-6400 Fax 0191-26-6415  
〒029-0803 一関市千厩町千厩字町149 Tel 0191-48-3733 Fax 0191-48-3736

ホームページ: <https://www.center-i.org/> メール: [center-i@tempo.onn.ne.jp](mailto:center-i@tempo.onn.ne.jp)

## お知らせ

### 募集

#### 「スポーツウエルネス吹矢」ジュニア会員募集中

(一社)日本スポーツウエルネス吹矢協会では、小学生から高校生までのジュニア会員を募集しています(未就学児の参加も可)。  
スポーツウエルネス吹矢は、5~10m離れた円形的にめがけて息を使って矢を放ち、その得点を競うスポーツです。複式呼吸をベースにした呼吸法によって血行促進、細胞の活性化ほか、精神力や集中力が身に付きます。全国大会も実施されており、日頃の練習の成果を試すことができます。活動場所など詳しくは下記まで。

**募集対象:**小学生~高校生  
**年会費:**500円 ※未就学児は無料  
**問合せ:**090-9749-0929  
(一社)日本スポーツウエルネス吹矢協会 北東北ブロック顧問・萩田)

### 募集

#### 第26回一関藤沢市民劇場 キャスト・スタッフ募集中

令和6年12月1日に公演予定の「第26回一関藤沢市民劇場」を一緒に創るキャストとスタッフを募集しています。「演じることが好き」「演じてみたい」「物を組み立てることや絵を描くことが好き」「音響や照明に興味がある」等々、未経験の方でも大歓迎です。詳しくは下記までお問合せください。

**募集内容:**  
＜キャスト＞小学生以上(定員なし)  
＜スタッフ＞音響班、照明班、化粧班、衣装班、美術班など  
各班高校生以上(若干名)  
**募集締切:**2024年8月5日(月)  
**問合せ & 申込:**0191-63-5516  
(一関市藤沢文化センター内 一関藤沢市民劇場実行委員会事務局)

### イベント

#### CHOPPER東北ツーリングNo.13 行こうぜ!宮城!女川!! 頑張ろう能登半島!!

オートバイ愛好者を中心にチャリティを目的としたイベントの企画運営を行う「CHOPPER東北(代表が花泉町在住)」では、下記日程でツーリングイベントを開催します。  
今回の目的地は宮城県女川町の特設会場で、チケット料金の一部は同町へ寄付します(交通費は自己負担)。詳しくは下記まで。

**開催日:**2024年8月25日(日)  
**目的地:**宮城県女川町  
**チケット料金:**  
＜前売り券＞3,000円  
＜当日券＞4,000円  
※ゲストによるライブ観覧料含む。18歳以下は無料。前売り券は7月までの販売。  
**問合せ:**090-6622-8028  
(CHOPPER東北代表・荒井)  
※問合せ時間は平日10時~17時

### 募集

#### 大豆加工商品等を購入する「ホームラン会員」募集中

(福)平成会が運営する就労継続支援A型「ホームラン」では、大豆加工商品(豆腐、納豆など)やこんにやく、季節に応じた商品を製造・販売し、会員宅や職場等へ届ける配達サービスを行っています(東磐井地域への配達は要相談)。

商品は基本メニュー(ホームランパック/2,185円(税込))ほか、希望する商品(例:木綿豆腐400g/185円、おから200g/60円、納豆3個パック/185円(全て税込))を選ぶこともできます。配達毎週1回、決まった曜日にお届けします。  
商品の種類やメニュー、価格等は下記までお問合せください。

**事業所名:**社会福祉法人平成会 就労継続支援A型「ホームラン」  
**問合せ:**0191-32-1381(ホームラン)

### 情報

#### ちいさな命をまもり隊「保護猫譲渡会」のお知らせ

岩手県南で「保護猫」活動(保護が必要な猫を一時保護し、譲渡会等で新たな飼い主を探す)や、野良猫を不妊し、飼い主のいない猫を今以上に増やさないための「地域猫活動」に取り組む「ちいさな命をまもり隊」では、「保護猫譲渡会」を月2回開催しています。

また、譲渡までの間保護猫を預かる「一時預かりさん(ボランティア)」も募集中です。条件等、詳しくは下記まで。

**開催日・会場(毎月):**  
＜第2土曜日＞蔵のひろば(一関市田村町8-12)  
＜第4日曜日＞リームスホーム(一関市大町2-50 1F)  
※いずれも13時~15時開催  
※7月は7月13日(蔵のひろば)、7月28日(リームスホーム)の開催  
**問合せ:**090-7061-7786(隊長・佐藤)

### 情報

#### 一関じもとと基金「第2回共感寄付」寄付受付開始

‘地域のために何かやりたい人’と‘それを応援したい人’を結びつける「一関じもとと基金」。審査会、キックオフ会議を経て、第2回共感寄付の参加団体が決定し、寄付受付を開始しました。今回は7団体がエントリーしており、一口1,000円からの寄付で、共感する活動・団体を応援することができます。  
詳しくはホームページまたは下記まで。

**受付期間:**2024年6月1日(土)~9月30日(月)  
**HP:**<https://ijimoto.jp/>  
**問合せ:**0191-26-6400  
(一関じもとと基金事務局 いちのせき市民活動センター)



### まちの写真展

スタッフがまちの1コマを切り取ります。



旧町村別の人口動態等を共有します。

### 作品名「美しい地域を護ります」



藤沢28区が令和2年に新築したゴミ集積所「第28区自治会護美スーション」の当時の役員の中に大工がいたこともあり、役員有志4~5人で製作。「新築なのにゴミという名前では……」という声から、現名称に。市の補助金を含め、総工費は33万円とのこと。

2024年6月1日付  
(2024年5月31日現在  
住民基本台帳より)  
※外国人登録者含む

一関市全体	前月比
人口	106471 -153
世帯数	46422 20
出生数	24 -6

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	53534	-24	24654	33
花泉	11690	-19	4681	2
川崎	3184	-8	1271	2
千厩	9566	-20	4088	-3
大東	11552	-46	4864	-11
東山	5738	-15	2274	0
室根	4272	-13	1801	-5
藤沢	6935	-8	2789	2

179 /106,471

一関市 市長公室 政策企画課 DX推進係

令和5年度より、総務部総務課から市長公室政策企画課に配置転換となり、令和5年3月策定の「一関市DX推進計画」に基づくDX推進業務を担う。

※DXの推進においては、最高情報統括責任者(副市長)を本部長とした「一関市DX推進本部会議」が設置されており、同会議と各課との間に入るのがDX推進係。



令和5年度に市が一関工業高等専門学校の学生企業に委託して実施した「出前型スマホ教室」の様子。

第119回 一関市 市長公室 政策企画課 DX推進係 x いちのせき市民活動センターセンター長 小野寺浩樹

「効率化」の先にあるもの ~目指すものは「D」ではなく「X」【後編】~

一関市では「一関市DX推進計画」の中で、「新しい技術や、新しいやり方(方法を理解してもらい、人々の生活を少しでも便利で快適なものに変えていく取組)」と定義しているDX。行政をはじめ、事業者が取り組むべきことだけでなく、我々市民も意識していくべきことがあります。生活を便利で快適なものに変えていくために、今必要な考え方とは?(2回シリーズの後編)。

小野寺 前回、「DX」の考え方について、「デジタル化(D)」よりも「トランスフォーメーション(X)」が重要であり、そのための手段として「デジタルの活用」がある、ということを確認し、行政や事業者側の「効率化」事例をお聞きしました。では、市民が「効率化」に向けて取り組むべきことは何でしょうか?

DX推進係 市民のみなさんにお願したいのは、新しい技術や新しい方法を「使いこなす」という部分です。デジタルを活用した変革の場合、「デジタル・デバイス」と言って、インターネット等の情報通信技術を利用できる人と利用できない人との間に格差が生じます。その格差を埋めるために「デジタル・デバイス対策」の取組を市としても行っていて、自宅等を訪問しての出前型スマホ教室は好評です。

小野寺 市民センター等でも近

年は携帯電話会社によるスマホ教室を開催していますが……。DX推進係 そういった大人数の前だと恥ずかしいという人や自分の契約外の携帯電話会社が講師だと気が引けるという人に向けて、一関高専の学生スタッフが希望者の自宅に行つて教えるという事業をしています。

小野寺 家庭内では聞けないんですかね(笑)

DX推進係 本当は家庭内や地域などで勉強会をしてもらえると良いのですが、息子・娘には「また聞くの?」と嫌な顔をされるので、聞けないようです(笑)

小野寺 自治会運営もアプリなどの活用で効率化が図られることもあるので、自治会の事業としてスマホ勉強会やりましょうね、という流れがあっても良いですよ。飲み会や交流事業の在り方を模索する自治会が増えているので、「飲み会の代わり

相談する流れができています。

小野寺 一関市ではゴミの出し方や道路通報に関するアプリがあり、最近では市の公式LINEの配信も始まっています。一方で、一斉メールなど、従来のシステムを使っているものもあり、利用する市民以上に、対応する市の職員も大変なんじゃないかなと思うことも……。

DX推進係 当時は画期的だった、需要があったりしたツールでも、今では古いツールと化してしまつたものが確かにあります。システムを導入してしまつた以上、簡単には変えられない現実もあります。ただ、自治体としてはニーズに合わないツールは「やめる」という決断も必要になりますので、常に見直しはしていきます。

小野寺 DXというのは、要はデジタル化を推進するわけではなく、デジタルも上手に活用して、効率良く仕事や暮らしを展開させていこうねということ。効率化してきた余力を他の業務・サービスなどに使っていくことが目的であつて、バランス感覚が大事ですね。

にスマホ教室をしよう」とか。  
DX推進係 市の「自治会等活動費総合補助金」の中にも「ICT活用分」というのがあり、自治会内の情報をオンラインで提供するためのシステムを導入する場にかかる経費を補助します。そうした活用も視野に、まずは使える人を増やす取組に期待しています。  
小野寺 自分たちの年代の枠で限定してしまうと「関係ない」と思ってしまうがちですが、世代の視野を広げてみると、「いずれば必要ね」と思える気がするんです。回覧板には回覧板の良いところがあるので、回覧板を切り替えるという話ではなく、ツールの使い分け。必要な人に、効率的に情報を届けるために。

DX推進係 5年で本当に変わりますね。意識の差を埋めることが大事で、それは住民だけでなく、行政職員も一緒です。システムが変わるのであれば、システムに合わせた仕事の手順に変えていかなければいけないので、その意識を持たなければいけないのです。

小野寺 ちなみに我々いちのせき市民活動センターは、グループウェアを使って日々の業務をこなしているのですが、DX化は進んでいる方ですか?(笑)

DX推進係 グループウェアを導入したこと、例えばスケジュール管理も書きボードか

DX推進係 従来のやり方では限界になってきているのに「従来のやり方を変えたくない」という感覚では、今の時代に合わなくなつてしまうので、スマホやタブレットなど、新しいものも、いつかは受け入れなければいけません。そういうスイッチを切り替えてあげるといいと思います。

※1 市が一関工業高等専門学校の学生企業「Next IWATE」に事業委託し実施するもので、同社社員2人が自宅などを訪問し、スマートフォンの基本的な使い方やアプリの操作方法などを教える。個人での申込のほか、友達同士、サークルなど複数人(5人程度まで)での申込も可能。問い合わせは0191-21-8633(一関市政策企画課)まで。

# 団体紹介

## 東山郷福餅つき隊

米の消費拡大とともに、古くから家々の祝い事で行われていた餅つきを再現し、集落の賑わいにも繋げていこうと、東山郷農家組合(汲民9区エリア)の下部組織として平成14年に結成。集落の絆とともに、古き良き時代の「文化」を次世代に継承中。

住所：一関市大東町汲民字伊勢堂22  
TEL：0191-75-4049

左の写真：復興支援で陸前高田市にも(平成23年12月)



# 息を合わせてつく餅、花咲く笑顔

## 米農家の課題を、集落の盛り上げに

平成6年、大東町汲民の汲民9区は「東山郷自治会」を発足。翌年、自治会名と同じ「東山郷」を用いて「東山郷農家組合」を立ち上げました。

初代組合長(芦正太郎氏)らは、平成10年頃から米の消費の落ち込みや米価格の低下など、農業課題に対し懇談を重ね、「昔のような賑わいのある集落を」と模索してまいりました。その中で着目したのがすでにほとんど出番がなくなった「臼」と「杵」。自身らの少年期に親世代が用いていたきたての餅の味を思い出し、使用頻度が極端に減った臼と杵の活用や懐かしい餅つき唄も再現しようと、組合長を含めた有志3人が「餅つきの復活」に向けて動き出したのです。

「昔は、どこの家でも祝い事となれば臼と杵を使って餅をついたものだ」と語るのは、有志の一人で、昭和11年生まれの小崎福雄さんです。昭和50年代になると、簡単に餅ができてあがる家庭用の餅つ

# とうざんこう 東山郷福餅つき隊

## 協力体制と女性陣の活躍

き機械が主流となりましたが、機械は「蒸かしたもち米を練る」のに対し、臼と杵は「もち米をつくことで仕上がる」ため「味(食感)が全く違う」のだとか。

「あの懐かしい味」を後世にも伝えたい……その想いは共感を呼び、組合員の家庭に眠る臼や杵を譲り受けることに。また、少年期に聞いた餅つき唄の記憶に近い音源(カセットテープ)を奇跡的に入手することに成功。当時の環境を整ったことで、平成14年、初代組合長を中心として、「東山郷福餅つき隊(以下、福餅つき隊)」を結成しました。

※「芦東山先生」の生誕集落であることが由来

「ソレツキヤレツキめでたいめでたい」和太鼓のリズムを加えた餅つき唄に合わせ、男衆が杵で餅をつき、タイミングをあわせて高々と餅を持ち上げ、空気を含ませまします。手水を注しながら餅を返し、その出来具合を確認する「手

合わせ」も慣れた手つきです。20分ほどつくと、出来立ての真っ白な餅が女性陣の手に渡り、親指と人差し指の付け根で一口大にカット。熱々の餅は、数種の餅ダレの中へ……。時間との勝負だと言わんばかりの手際の良い作業が続きます。

「女性陣の動きは見事なもんだ」と絶賛するのは、東山郷農家組合長で福餅つき隊3代目隊長の芦廣幸さんです。発足当初から、農家組合長が福餅つき隊の隊長を担っていたことから、今でも慣例的に兼務にしています。

「福餅つき隊員は農家組合員(44世帯)ですが、地域等のイベント出演がある際には、集落全体(自治会)に声を掛け、スタッフとして動ける体制としており、自治会や農家組合と連携を図りながら、協力的な関係性を築いている」と、芦さんは笑顔で語ります。

## 再現された「餅つき唄」ともじり

福餅つき隊を発足して最初の継承事業は、「餅つき唄の研修会」でした。隊員20人ほどが集まり、奇跡的に入手したカセットテープを聞きながら、民謡の唄い手だった地元の方から指導を受け、その成果として、隊員らの声で

録音。以後、「東山郷夏祭り(同自治会主催)」や「汲民地区文化祭(同実行委員会主催)」など、集落や地域・町のイベントで餅つきを行う際には、隊員らの声で録音した「餅つき唄」を「東山郷福餅つき隊の唄」として使用し続けています。

初代自治会長で、現在は区長の及川紀夫さんは、「集落の課題を吸い上げ、『地域を盛り上げよう』という初代農家組合長の熱い思いが、現在まで受け継がれている。自治会や家庭での餅つき行事はあるかもしれないが、町内を見ても餅つき団体はないようなので、発足以降、企業や商店街、学校など地域内外から声をかけて頂き、たくさん笑顔に出会えた」と語ります。

隊長の芦さんも「ここ数年は、コロナ禍で餅つきの機会もなく、継承活動が難しく感じていたところだったが、今年2月に大原小学校からの依頼で久しぶりに隊員に声をかけたところ、とても協力的だった。さらに、子どもたちや保護者らの笑顔を見て、改めて餅つき隊の意義を感じた」と続け、「代替わりを図りながら、地域の特徴ある活動として今後も継承していきたい」と、熱く語ります。

一度眠った臼や杵。百年以上も前から各家で使用されてきたものもあつた

## Q.あなたにとって「餅つき」とは？

### 3代目隊長



A. 先輩達からの財産

あし ひろゆき  
芦 廣幸さん

「コロナ禍後最初の依頼は不安もありましたが、隊員らの協力で無事成功。餅つきができて良かった、という声が励みです」と、今後の継承に意欲的です。

### 汲民9区 区長



A. 子どもたちはもちが大好きと言います。なぜかうれしいです。

おいかわ のりお  
及川 紀夫さん

「東日本大震災の被災地支援で行ったお振舞は生涯忘れません！」福餅つき隊の結束力と老若男女笑顔になれる餅つきでの出会いを大切にしています。

と言います。多くの祝いの席で使用され、「こちそう」として笑顔で食した昭和期。時を経て「東山郷福餅つき隊」は、平成から令和と時代が変わっても、息を合わせ、これからも餅を高々と振り上げます。

## - Photo gallery -



餅タレや餅をついた後の一連の流れは、集落の女性陣の間で受け継がれ、当初の主力世代から、次の世代にバトンタッチ!

## 味も作業も天下一品



手合いの加減で決まる男衆が餅をつくタイミングに合わせ、手水を注しながら、餅の出来具合を確認。手水の塩梅が餅の仕上がりを左右します。



餅つき唄に合わせてコロナ禍を経て、久々の餅つきは、令和6年2月一関市大原小学校のPTA事業でした。高々と振り上げた餅に、歓喜が!



結成時にTシャツとエプロンを揃え、揃いの法被(自治会所有)も餅つきには欠かせません。背中には「東山郷」が光ります。

## 紫色が「東山郷」の色

# 地域紹介

## 深萱自治会(黄海)

行政区は藤沢「23区」。東深萱、西深萱、京ノ沢(一部)の44世帯143人(6班体制)が暮らす。自治会化したのは昭和50年頃で、令和6年度より農事部、社会部、文教部、福祉保健部、防災部の5部会で活動中。



左の写真：令和5年度「どんと祭」の様子

## 先輩たちからの思いを受け継いで 古くからの交流の場として

考古学者の塩野半十郎氏の指導で「縄文野焼き」を再現した事から始まった「縄文の炎 藤沢野焼き」。藤沢町黄海地区の深萱自治会のエリアには、塩野氏が藤沢町に寄贈した700本の椿を移植した「塩野半十郎椿園」が立地し、隣接する「陶芸センター」は同自治会が指定管理を受託しています。同じく集落内にある堂良幹諸社どうらみきしよじやは、古くから住民の心のよりどころとして大切にされています。この諸社は、集落の低い土地に位置していることが特徴。一般的に、社(非神様)は人々の居住地より高い土地に置かれることが多いのに対し、同集落では「人々が集まりやすいように低い場所に作った」と言われており、全国的に見ても珍しいのだとか。屋根のかかった広い空間があり、自治会発足以前からその場を集落民の交流の場として活用、屋根の修繕も住民に寄付を募って行ってきました。

## 深萱自治会

### 藤沢

### 分校の思い出や、過去の功績を語り継ぐ役割も

現在、同自治会が自治会館として使用している「ひまわり館」は、明治27年に開校した旧黄海小学校深萱分校。昭和48年3月に閉校し、その校舎を同年から譲り受けました。黒板や職員室の表示など、当時の面影が残っており、当時の思い出とともに、大切に使用していることが伺えます。

目を引くのが、黒板脇に飾られた賞状。昭和52年に地方自治法施行30周年を記念して岩手県知事から贈られたもので、長年の自治活動の功績を称えるものです。同集

の交流を今もなお大切にしている同集落。次の世代にバトンを渡すため、時代に合わせた持続可能な仕組みづくりを、今後も続けていきます。

### - Photo gallery -



交通防犯座談会

防災部では毎年、黄海駐在所に依頼し、交通安全や各種防犯対策の座談会を開催(陶芸センター会場)。30人程が参加。



花壇の定植作業

藤沢町住民自治協議会主催事業「ビューティフル藤沢」にも参加する花壇は文教部が担当し、人材育成にもつなげています。



由来は花壇のひまわり

「ひまわり館」と命名された自治会館は旧黄海小学校深萱分校。教室が一つと職員室、運動場しかない小さな学校でした。

笑う門には福来る

同自治会員「かねはらつ亭よ」こと皆川洋一さんが、福祉保健部・女性部共催事業で寄席を行ったことも令和4年度。



落では、組織の形は変えつつも、昭和初期以前から自治組織での活動を行っていたと言い、「同自治会の歴史を物語るもの」として掲示されています。

副会長の阿部卓郎さんは、「古い歴史の中で住民の結束力が芽生えたのだと思います。それを発揮できる黄海地区民運動会(黄海地区住民自治協議会主催)や、自治会主催の『深萱スポーツ大会』も自慢の行事です」と笑顔で語ります。

「深萱スポーツ大会」は通算42回も開催してきたもので、コロナ禍の休止を経て、今年度から再開予定。自治会単独で行い、班対抗で複数の競技を行い、親睦を深めてきました。

しかし近年では、高齢化の影響で「スポーツ大会の継続は難しいのでは？」という声が……。移動手段の問題などで、現在はサロン活動なども行っていますが、「できる限り高齢の方も参加しやすい交流活動を企画しながら、地域の安心安全も図れるよう活動していきたい」と、熊谷さんは模索しています。

### 計画的な組織体制で「心構え」を育む

令和5年度までは、農事部、社会部、

文教部、福祉保健部、女性部、防災部の6部会で運営していましたが、令和6年度から女性部が福祉保健部に統合されました。背景としては、集落の担い手不足という課題のほか、「男女を問わないで参画する」という意味合いも。

社会部長は行政区長が、農事部長は農家組合長、文教部長はひまわり館を管理する「ひまわり館長」……というように、兼務する役が決まっており、区長宛に届く配布物を効率的に配れるように、社会部には班長が所属しています。文教部は子供会を主とした活動を行なっていました。集落内の子ども数が減少。活動の見直しを図り、現在はお花見会や環境美化活動などを主に行うこととしました。

これらの改革や仕組みは、人口減少に伴う役割の担い手不足をカバーし、「協力関係を強化するための措置」であり、「先輩方から教わって次の役員につなげていく事が大事」と語る熊谷さんと阿部さん。各部の部長は次期自治会長や副会長に就任することがほぼ決まっていることから、成り手の育成と心構えができることで、組織内でスムーズに役員を選出するために考えられたのが、現在の組織体制です。

八百万の神と、そこに集う住民同士

## Q.集落の自慢は何ですか？

### 自治会長



A. 和

くまがい あきら  
熊谷 明さん

副会長(庶務担当※)を2期4年経験後、現職へ。「会長になる心構え」を、先輩たちから教えられ、スムーズに就任。※副会長(2名)は庶務担当と会計担当に分かれる。

### 副会長



A. 結束力

あべ たくろう  
阿部 卓郎さん

2期4年目(会計担当)で、防災部の副部長(※)も兼務。阿部さんの代が深萱分校の最後の卒業生です。※防災部は部長が自治会長、副部長は副会長が兼務する。

## 千厩 ふるさとらいふ千厩店

筋力を鍛えるトレーニングマシンやダイエットにも有効な有酸素マシン、日頃の疲れを癒す肩こり改善マシンなどを完備する24時間営業のフィットネスジム。代表兼インストラクターの佐藤大喜さんが、一関市山目町の約30坪のスペースで平成31年3月にフィットネスジム「ふるさとらいふ」を創業、「より多くの方が利用できる施設へ」と、令和4年1月、設備拡大で千厩町に移転。令和6年2月には2号店「ふるさとらいふ大東店」もオープン。年齢や性別、時間にこだわらず、自分に合ったマシンを自由なタイミングで利用できるほか、インストラクターによる指導(3か月に1回)で健康的な生活をサポートします。

### 健康は宝！一人ひとりに合わせたサポートを

「一関市の健康を創り、未来を担う」をモットーに掲げ、フィットネスジム2店舗とパーソナルジム1店舗を運営する佐藤大喜さん(川崎町出身)は、市内高校を卒業後、上京。もともと体を鍛えることが好きで、都内のフィットネスジムに通う中、その魅力に惹かれ従業員に。「地元にもこうした施設があればいいの」と漠然とした思いを抱きながら、徐々に経営にも興味を持ち始めます。20歳になった佐藤さんは、「24時間営業のフィットネスジムを故郷に」を形にするため帰郷。「まだ20歳そこそこだったので、資金づくりには難しい点がありましたが、市内に約30坪の物件を借りることができたので、そこからスタートしていく」と決めました」と振り返ります。

3年目に事業を拡大しようと思っていた佐藤さんは、令和4年、千厩町に移転。85坪のスペースに50機以上のマシンを完備しました。

「工場勤務や事務職、まして、車通勤だと、筋力を使うことは少ない」「体を動かすスポーツをする」「決められた時間に集合する、道具を準備する」では、日常生活の中で

「ふるさと」を思い、若き経営者が誕生

抵抗がある方もいるので、「24時間いつでも利用可能、自分の自由な時間・空いた時間を有効活用できる」点の需要はあるのでは」と分析する佐藤さんは、今年2月に大東店をオープン。「千厩店はやや若年層向けのマシンを設置していますが、大東店は年配層も気軽に利用できるマシンを設置しており、会員も40代から60代以降の方々にご利用いただいています」と、地域に根差した設備・運営を心がけています。

### 「地域一番を目指しましょう」を目標に

令和6年6月現在、千厩店の会員数は約200人(男女比5対5、一日の利用者数約60人)、大東店は約80人(男女比4対6)となった同ジムは、個人トレーニングのほか、インストラクターでもある佐藤さんから3か月に1度ジムメニューの見直しや、フォームのチェック指導が受けられます。

令和5年8月、もっと早いペースで指導が欲しいとの声を受け、千厩町内に一対一で指導を行う「パーソナルジム」も開所(大東店開業のため休止していましたが、令和6年6月から再開)しました。

フィットネスジム事業の開業から5年経ち、佐藤さんは、「節目になるので、ジムは継続しつつ新たなことにも挑戦したい」と、今後の目標として「地域密着型24時間フィットネスジムの経営者育成(全国展開)」

「一関市内で起業や副業を考えている人たちのコミュニティの場づくり」の2つを掲げます。

ジム内において、年齢を問わず会員のさまざまな悩み相談を受けることもある佐藤さん。「地域との関わりをもっと持ちたいと思っているので、できるだけみなさんに寄り添う形で貢献できれば」と笑顔を見せながら、「『地域一番を目指しましょう』が目標」という若き経営者は、新たな一歩を踏み出します。



- 1 「パーソナルジム」で装置の説明をする代表の佐藤大喜さん。
- 2 店名が目目を千厩店外観。
- 3 千厩店の内部。各種トレーニングマシンが揃っている。

DATA  
 〒029-0803  
 一関市千厩町千厩前田84-1  
 TEL 080-5745-2071  
 HP <https://www.hurusato2022.com/>

今月のテーマ  
 地域運営の落とし穴(48)  
 子どもの仕事



### 「今の年齢で経験すべきこと」のチャンスを逃さず

「種まき桜」が田植え時期を知らせ、本格的に農作業シーズンに入りました。千厩町大平にある「種まき桜」は、今年も咲いたでしょうか？これをみなさんが読んでいる頃には、田んぼはもう中干しの時期ですね。

今では高齢化や自作農離れによって、水稻栽培を農業法人に委託するケースも多くなっていますが、私は、父の亡き後、一人で継ぐことを決意し、5年目になります。本誌でも何度か失敗談を掲載しているのですが、一年に一度しかない作業であり、経験による判断が求められるため、失敗もありますが、反省しながら、それなりに楽しんでいるところです。

以前は、種まきをし、ビニールハウスで育苗をしていたのですが、ハウス管理は兼業農家には難しく、苗は買うことにしているので、我が家の水稻栽培は、耕起作業、肥料散布から本格的にスタートします。

トラクターに肥料散布機を取り付け、面積あたりの散布量を設定すると、自動で肥料が散布されるので、機械化はやはり便利。しかし、トラクター速度と肥料散布の割合計算が難しい。うまく計算ができないので、過去4年の経験で、副変速やクリーブ速度の調整をするものの、いざスタートしてみると、肥料の量が多く撒かれているような気がしてきて、途中で減らしてみたり……。結果、肥料が2袋あまってしまい、今年もうまくいきませんでした(笑)

もう一度トラクターで回ることも考えましたが、2袋という少なさのほか、時間もかかるため、肥料桶に入れて手で振ることにしたのですが、この時に思い出したのが、子どもの頃、肥料桶で振る作業をよく手伝っていたなということ。「子どもの仕事」として、十分に役割を担えるものだったのです。実に30年ぶりくらいにやってみたのですが、体が覚えているもので、短時間で肥料の量を減らした部分に振り直すことができました。

地域で話し合いをしても、「かつては『子どもの仕事』だった作業」というのは、たくさん出てきます。今の子どもたちでは経験することのないことを、かつての子どもたちは、**生活の中で体験し、技術を習得していた**のです(この場合、児童労働に該当するものではなく、あくまで家のお手伝いレベルのものです)。

ちょっと前の時代は、「子どもの仕事」と言えば、お風呂で焚く薪材を集めたり割ったりすることや、床の雑巾がけや柱時計のネジ巻き、暦の日めくりなど。外仕事では、田んぼでの肥料振りや田植え後の植え直し、畑の草取り、収穫など、**季節ごとに、「日常生活を送る中で子どもでも十分に担えること」がありました**。お手伝いをするにより、**その意味を知り(見て覚える)、季節を知り、四季の生活のノウハウを覚えていったと同時に、「家族」というチームの結束力も高まっていたのだ**と思います。

ずいぶんと便利になり、子どもの仕事も「家事手伝い」が中心のように様変わり。生活の中から「生きる術」を身につける機会が減っていると課題視されることもあるのですが、実際、我が子の様子を見ると、花の蜜を吸ってみたり、草摘みをして髪飾りを作ったり、側溝があれば入って水遊びをしたりして、**意外と、昔の子どもとやることは変わっていないんだ**と思うことも。今は、**チャンスが少ないだけで、「いかにチャンスを与えてあげられるか」が大事**なのでしょう。

「わざわざチャンスを与えなければいけない」こと自体が課題だという見方もできますが、そういう環境を作ったのは今の大人なので、大人の都合だけではなく、視野を広く持たないと「誰のための地域なのか？」という疑問が生じます。子どもは、いつの時代も子ども。むしろ、今の子どもの方が、デジタルを使いながら、昔のようなアナログなこともするので、ハイスペックなのかもしれません。

**その年代だからこそ感じることを存分に体験**することで、五感を刺激し、デジタルの刺激や興味も持ちつつ、社会の仕組みが複雑化する「現代」、そして「将来」を生きてほしいものです。



本誌「自由研究」で密着した茅葺屋根の葺き替え作業での一コマ。こうした作業風景にも、かつては子どもたちの姿があったことでしょうか。

ミッション 88

# 仕事の流儀 茅葺屋根の葺き替え①

## ファイルNo.5

# 茅葺屋根の「差し茅」作業に密着してみた

本誌2024年1月号の「火のある暮らし」で、調査にご協力いただいた室根町矢越の小山家で、茅葺屋根の葺き替え作業(差し茅/20年数年ぶり)を行うという情報を入手した我々。小山家の葺き替え作業は市内各地の有志による協力のもと、健在する「市内で唯一の職人※」が棟梁を務めるということで、その作業に密着させていただきました(令和5年12月～令和6年4月)。

具体的な作業の流れや技術は次号でお伝えすることとし、今回は、棟梁の佐藤さんが茅葺職人になったきっかけや職人としての想いなどを中心にご紹介します。

※今回は「職人」の定義を「その技術を生業としている人」としています。小山家の葺き替え作業には、棟梁の佐藤さんや市内各地から集まった有志が複数人作業に参加していますが(我々もお手伝いで参加)、「職人」とはカウントしていません(「かやぶき民家を残す会」がかつて行った茅葺職人養成の受講者(職人見習い)の人もいます)。  
※なお、茅葺屋根の葺き替えを生業とする秋田県在住の若い「職人」さんも2名参加していました。



お世話になった職人さんたち(手前中央が小山家ご夫婦)



茅葺屋根の家がスタンダードだった昭和初期までは、各地に存在した茅葺職人。現在、当市に茅葺職人は1名のみ。茅葺屋根の葺き替えをするときの「茅葺」「茅採取」の技術はユネスコ無形文化遺産「伝統建築工匠の技」にも登録されており、文化として継承すべき貴重な技術です。そこで、当市に現存する茅葺屋根の葺き替え作業に密着し、その職人技(伝統技術)を記録しました。

※記載内容はあくまでも当センター独自調査の結果です。

### 仕事の流儀1 「棟梁」を選任



茅の下処理を行う才治さん

茅葺屋根の葺き替え作業が「結」で行われていた時代、近隣の複数軒で「茅無尽(後述)」を組み、材料の供給に加え、労働力も提供し合っていました。当時は集落内に「棟梁」になり得る人材が何人か存在しており、そうした人材(=職人)を選任するところからスタートします。逆に「茅無尽」等が存在しない現代においては、棟梁が「自分の手で作業してくれる人」を選任することがスタートと言えます。

今回の「棟梁」 佐藤才治(昭和11年生まれ/取材時87歳/藤沢町在住)

#### 【茅葺職人になったきっかけ】

中学校卒業とともに茅葺きの仕事を始めて72年が経つ。当時、生活が苦しく貧しかったため、近所の茅葺職人の下で生活費を稼いだ。葺き替えをする家では、朝食をご馳走になりながら、「茅こさえ」や「茅束ね」の作業をし、一日80円(今で600円程)をもらっていた。

#### 【「職人」として認められたのはいつ?】

茅葺きを本業にする人は稀。多くの職人が農家や山仕事をしながら農閑期に茅葺きの仕事をしてきた。自分も山仕事(木こり)などをしながら、副業として茅葺きの仕事をしてきた。茅束作りを10年行いながら、師匠や先輩をよく見て一連の流れを覚えていった。屋根に上り始めたのが20代頃で、50代になってようやく棟梁を任せられるようになり、一人前(職人)として認められた。



この仕事のやりがいを「一連の作業を覚えるまでは苦労したが、葺き替えを行う中で、自分が手掛けた角が綺麗に仕上がっていくこと」と語る。

#### 【茅葺職人が減った要因は?】

昔は集落内に棟梁になり得る人材が存在し、その人に葺き替えの話が来る(または仕事を取ってくる)。仕事を頼まれた人または仕事を取ってきた人が棟梁となる流れがあったが、弟子の育成に時間がかかることや、茅葺屋根自体が減り、かつては毎年あった仕事が、不定期となり、収入が安定しなくなったことで、この職に魅力を感じる人がいなくなったのだろう。

### 仕事の流儀2 「茅」の準備

植物分類学上は「茅」という植物は存在せず、ススキ、ヨシ、チガヤ、カリヤスなどのイネ科の総称を指します。当地域では、茅=ススキやオギを指すことが多いようです。

茅葺屋根が主だった時代は、20戸程度の近隣の家々で「茅無尽」を組織し、年に1戸の屋根が葺ける程度の茅場(茅を育てる山野)を持っていました。葺き替えは、年限に達した家から順番に行われ(入札制の無尽も)、計画的に茅葺屋根を維持していました。

しかし、茅葺屋根の家が減り始めると、「茅無尽」も維持できなくなり、茅や人手を集めることも困難に……。結果的に茅葺屋根を維持するには業者などへの依頼をせねばならず、多額の費用が発生することから、維持を諦める家が増えたと考えられます。

そんな中、今回は、有志の協力の元、自分たちで市内の茅刈場(大東町興田)で茅の刈り取りを行いました。

Step1 茅を刈る

Step2 茅を「まるく」

Step3 運搬する

Step4 乾燥・保管

刈取作業は農閑期の11月下旬～雪が降る前。毎年刈取りを行うことで、3m弱の真っ直ぐで茎がしっかりしている均一性のある良質な茅に育つため、葺き替えの予定がなくても、茅を刈取ることが大事なのだとか。

刈る→選別→方向揃えて「まるく(束ねる)」という作業を分担で行う。茅は太く固いため、草刈り機でも重労働。背丈より長いため、同じ方向に倒すにはコツが必要(同一方向に倒さないとう、束ねる人が大変)。

かつては家の周辺に茅刈場があり、各家の軒下で乾燥させたが、今回は茅刈場から離れた倉庫で乾燥させるため、軽トラックで運搬。長さのある茅を運搬するには一苦労……。当時は馬や牛の背中でしょうか。

今回は「差し茅」なので完全な葺き替え時の3分の1程度の量を使用。運搬時の束をほどこし、小束4つに整え、さらにその小束を1つの大束(大丸)に整えて保管。軒下での乾燥だと、雪囲い代わりになるそう。



屋根の趣を左右する角部分にはオニガヤ(=荻(オギ))と呼ばれる太く光沢のある茅を使用。入手が難しく貴重な茅。

### 「茅葺屋根」の今昔

茅葺屋根(草屋根)は、縄文時代の竪穴式住居に見られるように、紀元前から存在していたと言われ、屋根の形状や材料(ススキ、ヨシ、稲・麦藁等)の違いはあるものの、全国的に存在していました。断熱性、保温性、雨仕舞、通気性、吸音性を兼ね備える茅葺屋根は、当市においても、昭和初期までは民家の大半を占めていました。

一方で、茅葺屋根の欠点は耐火性が悪いことです。一度火が付くと直ぐに延焼してしまうため、建物が密集するところでは度々火事が発生。明治以降、各地で鉄道の開通が進むと、蒸気機関車からの火の粉が茅葺屋根に引火し、火事が発生していたという記録も……。そのため、国が沿線の茅葺屋根をスレートまたは瓦葺きに改良する補助事業を実施したり、建築基準法などの整備が進められたことで、防火性は高まったものの、沿線や市街地を中心に、戦後、茅葺屋根は激減していききました。

農村部での茅葺屋根の減少を加速させた要因には「生活様式の変化」と「結の崩壊」があげられます。「結」とは、農村社会に古くからみられる相互扶助や共同作業の慣行で、田畑や茅葺屋根の葺き替え作業等は「結」で行っていました。しかし、機械の導入等で「結」が不要になり、「結」の仕組みが維持できない状況に……。また、茅葺屋根の維持には、「家と暮らしのバランス」が不可欠でした。竈や囲炉裏で煮炊きした煙が屋根裏に上り、煙の中



千厩町小梨にある県指定有形文化財(平成8年指定)の「村上家住宅」。同宅の管理を行う村上和子さんは、平成17年に「かやぶき民家を残す会」を立ち上げ、茅葺職人の育成を行ったことも(現在は会員の高齢化により活動休止中)。

※「村上家住宅」の茅葺屋根の維持管理は現在も有志の「結」で行っている。

	平成15年※1	令和6年	うち文化財や観光施設
一関	3	2	2
花泉	3	3	2
川崎	2	0	0
千厩	5	5	1
大東	0	1	1※2
東山	0	0	0
室根	7	3	0
藤沢	24	10	0

※1 今野幸正(2009)『みちのくいわての消えゆく茅葺「直家」』に掲載されていた数(実態と異なる可能性あり)  
※2 小森塾/未掲載なだけで、平成15年にも存在している

に含まれる防腐力の強いタール分が屋根の裏側から茅にしみこみ、茅の腐朽を防いでいたが、戦後の生活改善運動で、煙突のある竈が普及。その後も電化製品やガス燃料が普及し、囲炉裏も姿を消します。こうして昭和50年頃には茅葺屋根が珍しいもの……。『みちのくいわての消えゆく茅葺「直家」』(今野幸正著)によると、平成15年時点で、当市には44軒の茅葺屋根の住宅が記録されていますが、令和6年3月4月に当センタースタッフが目視とヒアリングで調査したところ、24軒しか茅葺屋根の家は確認できませんでした。

#### 茅葺屋根の家は、もう作れない?!

上述の通り、維持が難しいことから、全国的にその数を減らした茅葺屋根の家ですが、新築で建造することは可能なのでしょうか?昭和25年に公布された「建築基準法」の第22条(当時)で「建築物の屋根は不燃材で造り、又は葺かさなければならず」と明記されたことにより、屋根には不燃材料の使用が義務づけられ、茅葺屋根を新築で造ることは実質禁止とされました。その後、何度か法改正が行われ、当市の場合、現在は「建築基準法第22条」と「準防火地域」に指定されている地域(一関、千厩、東山、花泉、大東地域の一部が規制の対象地域。ちなみに宮城県は全県下で法22条地域)では新築や既存の茅葺屋根の家に対する増築などができません。

つまり、規制対象地域でなければ、新築等も可能ですが、新築費用が高い(職人や業者が少ない、原材料の不足等)ことや、その後の維持管理の大変さなどから、通常の住居を新築するよりもハードルが高いと言わざるを得ないでしょう。しかし近年、茅葺民家での暮らしに憧れ、「トタン屋根を被せた元茅葺民家」を復活させる事例もあるとか。様々な観点から、その魅力が再評価され始めています。